【３】宇久地区ってこんなまちです

（宇久地区の紹介）

〔佐世保市における宇久地区の位置〕

宇久島は、佐世保港から高速船で１時間２０分、フェリーで２時間３０分かかる西方６０ｋｍに位置し、東西８ｋｍ、南北７ｋｍのほぼ円形の島で、周囲は４７.４ｋｍ、面積は２６.４ｋｍ^{2}です。

島で最古の岩石は、１９０万年前に火山が噴火した際にできた平玄武岩（たいらげんぶがん）と言われていますので、宇久島はその頃に誕生したと考えられます。また、円仁上人の「入唐救法巡礼行記巻１」（にっとうぐほうじゅんれいこうき）によると「承和（じょうわ）５年（８３８年）に、第１７次の遣唐船の日本最後の寄港地となった」とも記されており、宇久島の歴史の古さをうかがうことができます。

海上から眺めると、すそ野が広く“五島富士”と称される標高２５８ｍの城ヶ岳を中心とする美しい島の姿は、ヨットに乗る人々の間でも絶賛されています。

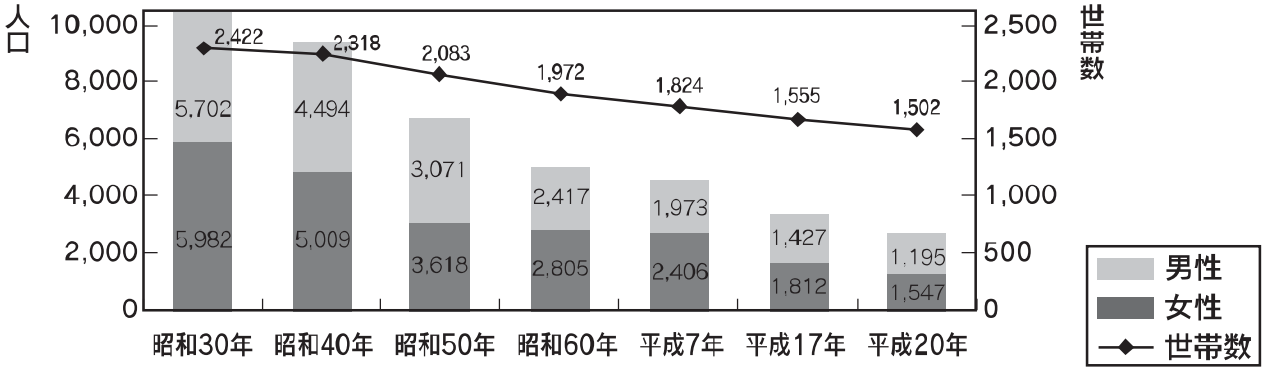
東海岸に広がる島で最大の砂浜海岸「大浜」は、白い砂浜と蒼い海が広がる「日本の快水浴場百選」に選ばれた一級の海水浴場です。広い砂浜には、絶滅危惧種の植物や動物が多く生息しており、そのまま自然博物館になっています。

西海岸には、雄大な草原や地形をそのまま利用した天然のゴルフ場である平原ゴルフ場があります。また、かつて平家盛公が島に上陸した際に船を隠した「船隠し」と呼ばれる入江や、家盛公が火を焚いて暖をとったとされる「火焚崎（ひたきざき）」と呼ばれる岬があります。

城ヶ岳の山頂からは、３６０度の大パノラマが広がります。南は小値賀諸島の全景から五島列島の最南端まで、東は平戸諸島、生月、的山（あづち）大島。北から西には果てしない東シナ海が広がっています。

島の人々は、このような恵まれた自然の中で歴史に育まれながら、温かく人情味あふれる詩情豊かな町をつくっています。

（宇久地区の人口推移）　※いずれも10月1日時点の統計資料



（宇久地区“わがまち自慢”）

宇久地区には“自慢”がいっぱい！その一部を紹介します。

ほたるの里

本飯良（もといいら）地区を流れる宮の首川沿いでは、本土より１ヶ月ほど早い５月頃から、数千匹のゲンジボタルの幻想的な舞を見ることができます。

午後８時頃になると、水面や草むらから黄色の光が現れ始め、やがて無数の帯が辺り一面を包みます。

宮の首川では、「本飯良ホタル保存会」が、市民にホタルを通じて自然の大切さを学んでほしいと、ホタルの幼虫の餌になるカワニナの放流や川の清掃を続けています。その甲斐もあって、一時減少していたホタルの数も年々増えつつあります。

楽しい祭り

一年を通じて、島の各地では、祇園祭、おくんちなどの楽しい祭りが数多く催されます。

旧暦６月１７日の夜には「竜神祭」が行われます。夕方暗くなる頃、提灯に導かれながら町を一巡した神輿が、子どもたちとともに大漁旗や神灯（ぎょとう）で飾られた漁船に乗せられます。船は港内を右回りに３周し、その際、子どもたちが「ヒヨヒヨヒヨー」と何度も叫びます。これは、むかし龍宮に連れ去られた笛の名手の「生きている証として海底で奏でた笛の音」を模したものと言われています。その後、沖の瀬でお祓いが行われ、船から御供物を海中に沈めた後に、帰港します。

この祭りで、島の夏はたけなわとなります。

大浜海水浴場

島内最大の遠浅の砂浜海岸で、白い砂浜が８００mにわたって続き、海水はマリンブルーに輝く、県内でも有数の海水浴場です。

駐車場やトイレ、キャンプ場なども整備されており、自然の中で思いっきりアウトドアを満喫することができます。

沖合に平戸諸島を一望でき、近くには磯釣りのメッカである、古志岐島もあります。

また、浜辺ではウミガメやハマボウフウなどの貴重な動植物を数多く観察することができるほか、丘には角礫岩（かくれきがん）の見事な露頭もあります。

食べものがおいしい

大自然に囲まれた宇久島には、海・山の恵みを受けた豊富な食べ物が数多くあります。

その中でも、東シナ海で育まれた四季折々の魚介類は、島を代表する特産物で、イサキや水イカ・鮑（あわび）・ウニなどはとても美味です。

また、ふるさとの伝統の味として受け継がれてきた「かんころ餅」は、さつま芋の風味が豊かな昔懐かしい味です。

そのほか、島で育てられている「宇久牛」は、良質の霜降り和牛として名高く、高級黒毛和種の肥育素牛（ひいもとうし）として名声を得ています。

その他にも、ふるさとの香りが広がる自慢の逸品が数多くあります。